

古井由吉「雨宿り」論

一

古井由吉の短編「雨宿り」は、平成十八年八月の「群像」に掲載され、短編集『白暗淵』(平19、講談社)に収録された。

「雨宿り」について詳しく論じた先行研究は、皆無に等しい。^{〔1〕}そこで本稿では、「雨宿り」の主題や内容や構成や登場人物や文体等について、詳しく考察したい。また空間論や時間論や語り論からも明らかにしたい。

平成十八年に古井は六十九歳であり、古井の心境がどのような位相にあり、小説を書くということについて改めてどのような認識していたか、その様相を明らかにすることも試みたい。現代文学はどうあるべきかということについても極めて自覚的な書き手である故に、現代の小説の在り様を照射することにもつながるはずである。

和 田 勉

古井は、飯田橋文学会編『現代作家アーカイヴ1——自身の創作活動を語る』(平29、東京大学出版会)の中で、『辻』(平18、新潮社)『白暗淵』(平19、講談社)『やすい花』(平22、新潮社)の三作品について、「老年への急坂で書いたものに、どうも私のなかのものがかなり煮詰まっているんじゃないか。そのなかにはもちろん老年もあるけど、初老も中年も青年も少年もあるように思った」と述べている。語り手の主人公が七十歳に近い老年であるので、時間の停滞した回想の中では、自身の中年期や少年期の体験なども取り込まれて、自在に時空間を往還しているのである。このことについては、後で二項対立と両義性という視点からも考察したい。

また古井は、この「雨宿り」が収録されている『白暗淵』について、「年の坂」(『楽天の日々』所収、平29、キノブックス)の中で、「自分がたどたどしくも書き綴っていることは所詮虚

構であり、あるいは虚妄であるかもしれず、そのことは片時も忘れてはならないが、虚構とはつまるところ何なのか、と作品を進める間に訝つて筆の止まることがあった。虚構とは招魂のための、姑息ながらの、呪術みたいなものではないか、とある時唐突として考えた。招魂と言つても、その招くべき魂のことは、知れぬことにしている。魂と言つ方には不死でなくてはならず、その不死というところで思案は足止めをくらう。紛れ失せた記憶を招こうとする、というほどのことを考えたまでである」と述べている。ここには当時の古井が、どのような小説作成上の模索や工夫をしていたかが示されている。小説を書き綴ることが、不死であるべき魂を招くとか、紛れ失せた記憶を招くことにつながるという独自の捉え方をしている。「雨宿り」に即せば、この考えは既に故人となった母などの親族のことを同伴者のように追想するところに顕著に示されている。

二

「雨宿り」の冒頭は、「稲妻にも雷鳴にもその老人の顔はまるで反応を見せなかった。目は開けているが、睡ねむっているかのようだった。雨脚はいよいよ激しく、廂から滴が簾となつて垂れ、格子の窓に背を寄せて二人は並んで立っていた。当時でもとうに珍しい遺物になつていた仕舞屋風の平屋の、軒下の雨宿りに

なる。笹山が駆けこんだ時には、老人は家の内からふらりと出て雨脚を眺めている姿に見えた。しかし肩が濡れていて、手には傘を衝いている。傘も間に合わなくなった降りを、笹山とひと足違いに、ここへ避けたものらしい。雨の音に耳を聳されてお互いに物も言わずにいた。今から二十年あまりも昔、笹山は四十代のなかばに来ていた」とある。主人公の笹山は五月の連休過ぎに、激しい雨に見舞われ雨宿りをするようになる。

「雨宿り」では、四十歳代で体験した雨宿りのエピソードを、二十年後に回想し、意味づけようとしている。あの日の雨宿りで傍にいた老人は一体何物だったのか。「老人の姿は、顔こそ忿怒の相を永劫に刻まれたように浮き立たせた」とあるが、まさに忿怒の仏像のような形相として笹山には映つたのである。「若い者の眼は、強くて、恐い」という老人の台詞も、眩かれた当時は、傍にいた笹山の視線の鋭さを気配として感じ取り、警戒したのかと思う。その後しばらくすると、「あの年寄りには、窓の内ですと女と交わる男と、傍に立つ濡れねずみの男とに、同じ臭いを嗅ぎつけていたのか」と思うようになる。どちらも老人には、何か鬼気迫る雰囲気を与えていたのではないかということである。二十年の歳月が過ぎた挙句に、「笹山に向かつて傘の下からつぶやいたのは、自身の壮年の残りを笹山へ投げて渡したか、とようやく悟つた気がしたのである。老人の眩きは、笹山に向けられたというよりも、若い頃の老人自身を回想して

の感慨ではなかったかと思うようになる。そこには何十年も隔てて、老人の自嘲や自虐の思いが反映していることになる。更に言えば、日常に遣り取りされる言葉も、どれ程理解して伝わっているかということへの根源的な不信が投影している。それでも老人が若者一般について述べたのか、老人自身の個人的な体験を踏まえて述べたのか曖昧なままである。恐らく両者が混じり合ったようなところから出た老人の呟きだろうが、作品の中からだけではつきりしないままである。行きずりの老人であるから仕方がないところがあるが、それでも笹山の脳裏には、禅問答のような言葉としていつまでも残ったのである。

老人にこだわり二十年後に回想する笹山の感性も独特である。ようやく老人と同じ年齢に達して、老人の言動に得心したというだけでは済まされないとある。あの老人は笹山にとつて、分身めいた存在として蘇っているところがある。老人の視点を取り込むことで、二十年前の自分の姿も顧みられている。

背後の部屋に感じた男女の気配は何だったのか。「窓の磨硝子は夕立の冷気に触れて、内と外から露を結んで濡れ、軒下に立つ人の影を透かしているはずだ」ということで、窓の磨硝子を通して、気配よりもっと濃密な存在の影として伝わっていたのである。背後にいる気配の「格子の窓の内の男女」は、性ということだけでなく、仏教で言う生老病死の「生」を象徴しているとも取れる。そこにいる男女によって、この世にいずれ

生まれて来る命が暗示されていよう。仏教で言う、娑婆の四苦における「生」の暗喩めいた存在である。「雨宿り」には、老病死の実相は随所に描かれている。

また、背後の男女の気配は、現代社会が猥雑なものに包まれていることの象徴のように描かれている。二十年が過ぎれば、「あれはまやかしのような夕立だった。雷鳴とともに雨が走り、あの窓の内の女も今では高年に入ったことだろう、まして老人はおそらくとうにこの世にはいない、もう長年、死んでいる、と数え返す間にも雨の音は引いて部屋の内は明るくなり、日が差して来た」というように、客観化、相対化して捉えるようになる。あの老人もはやこの世にはいないだろうが、笹山の記憶の中では生きていたのである。

笹山は雨宿りの記憶と踏切りの警報への怯えを、つながりのあるものとして捉えている。笹山はかつて人から聞かされた話を手掛かりに、「人はとかく踏切りのところで失踪したものだ」とか、「日の暮れなずむ頃に、時刻表にはない白い電車が踏切りで待つ人間を拾っていく」とかいったことを思う。雨という自然の厄災と踏切りという人工の厄災であり、両者がつながって記憶に残っているというのである。

また、「人を殺した人間が、かりにそばにいたとしたら、それと感ずるだろうか」ということも、人から尋ねられたことをきっかけに、半月後に自問自答してしまう。どちらの話も具体

的な登場人物の語りとして示されている訳ではなく、ただ人生の行きずりで聞いた話が、むしろ主人公の記憶にいつまでも留まってしまうのである。笹山の脳裏には、娑婆の老病死の不安や恐怖が付きまとっているのである。むしろそのような不安や恐怖こそが、この世を生きる実相でもあると笹山は思っている。

その一方で、「雨宿り」には随所に社会的な事件や世相が描かれており、そのような殺伐とした世の中をくぐり抜けて生きて来たことが示されている。今も昔も、そんな世の中をくぐり抜けて来たという実感が笹山にあり、人の世とはそのようなものという諦念も窺える。殺伐とした世相や事件について、「これはすべて天候不順のせいだ、天が狂えば地も人も狂う、と古めかしいことを言う年寄りも」いて、自然の異変と異常な事件を結び付ける者もいたのである。「天が狂えば地も人も狂う」という辺りは、作品集のタイトルの「白暗淵」とつながっているように。

「雨宿り」が作品集『白暗淵』に収録されているせいか、「雨宿り」には、「あたりが白く、真つ白になり、背後で高いところからドラム缶でも落としたような音がして、雷鳴となつて跳ねて転がり」とか、「雨は止んでほの白い光が道に差していた」とか、「日の暮れなすむ頃に、時刻表にはない白い電車が踏切りで待つ人間を拾っていく」など薄明のような白いシーンも目立つ。このような白へのこだわりは、微かな光につながり、仏教で言う「白道」のような浄土へ到る細い白道に重なっていると

ころもあるう。

疎開や空襲といった記憶の最深部にある混沌も、そのまま表出されている。それは、笹山におけるトラウマめいたものである。これは疎開児童として過ごした古井の体験と重なっているところがある。

菖蒲の花の黄色が無惨と感じられるのは、「子供の頃の、在所の夜の田畑の間からまもなく城下町の炎上を、声の届かぬ阿鼻叫喚の惨景を見つめた、その怯えの照り返しか、と思つてきたが、今日はその花の色が、長い睡りの後の目覚めのように、眼に深く染みた。花とは恐怖の精華か、恐怖の狂気に捉えられて人が変容するそのたびに、どこかしらで、このように無垢の花がひっそりとひらいて、雨を受けて揺れるのではないか」と思う。空襲の中で菖蒲の花を怯えながら見たので、この黄色い花を無惨なものとして見てしまっていたが、実は無垢の花なのではないかと今では思うようになる。

結末の「その午後、谷間たにまいの町でわずかな人目の隙に自宅のすぐ近くから失踪した少年が、翌日には八キロも下流の、川に臨んだ山林で絞殺体となつて発見された」というところでは、世相の凄惨な事件を改めて描き出している。「雨宿り」には随所に世相や事件が意図的に挿入されているが、そこには殺伐とした世の中と隣合わせで生きていかざるを得ないことが示されている。笹山の想念めいたままで終らせたくなかつたのである

うし、ここでは人生という仮の宿に在ると、死も隣り合わせにあるということを伝えようとしている。古井の言葉に即せば、「極限状況と日常が隣り合っている」（『現代作家アーカイヴ1——自身の創作活動を語る』）ということである。それでもいわゆる短編小説のオチとは、少し異質であると言わざるを得まい。結末が作品全体を意味付けするというよりも、混沌とした現実をそのまま引きずってしまうというような終り方である。

雨宿りを通して、人生の無常迅速を象徴的に描き出している。七十歳の笹山の現在の身辺については、「雨の降り出す前には手の指先から肘のあたりまでがひりひりと、険悪そうにざわつくにつれて頭の内が、ひとつの事を考え詰めたあげくに何ひとつ考えられなくなる時と同じに、徒らに痛^{いたず}るのに苦しめられ、どうせ低気圧か前線の接近に埒もなく反応しているのだらうが、七十に近くなつて歳月の澱^{おぼろ}がいよいよ融けきらず脳や末端の毛細管を塞ぎつつあるしるかとも疑った」とある。老病死への自覚が深まると共に、戦慄すべき人生の無常を実感しているのであり、それが「雨宿り」に象徴的に表出されている。

「雨宿り」には、現実と幻想、現在と過去、生と死、男と女、老年と若年、随想と小説といった二項対立するものと両義的な要素が混沌としたまま存在している。

これらの二項対立と両義性について、「雨宿り」に即して見に行くことにする。まず現実と幻想、現在と過去についてであ

るが、七十歳の現実から二十年前の雨宿りについての回想をすることは、もはやどこか幻想めいている。雨宿りをしていた二十年前のことを回想しながら、笹山は随所で幻想めいた思いの中にも入り込んでいく。結末では、子供の頃の空襲や疎開のことまで回想している。現在の中に過去の記憶や出来事が混在し、複雑に交錯している。七十歳の笹山の脳の中では時間が停滞しがちであり、老年期も中年期も少年期も、混沌とした記憶のままに蘇っているのである。

生と死、男と女、老年と若年についても、同様のことが言える。父や兄などの肉親のみならず、あの雨宿りの時に傍にいた老人ももはやこの世の人ではないと思う。雨宿りをしていた時には、傍には老人がいたが、背後の部屋には若い男女の気配が感じ取れたのである。笹山の死生観めいた思いも、眩きような形で漏れて、読者に伝わるようになっていく。

随想と小説については、一見小説のような体裁を取っていないが、随想的な要素を取り込むことでリアリティを獲得している。老病死にまといつかれていく人生が随想的に描かれている。物語性を切り詰め、随想的であることで説得力が増している。

主人公の体験は、作者の年譜とも重なるのでそれについても見ておきたい。

「あの踏切りの事から三年ほどして姉を亡くし、それから五年して一昨年には兄を亡くし、昨年の冬には母親の里の当主の

従弟を亡くし、その雪の日の葬式の時にわずかな行き違いで話もできなかった叔父をそれから半年足らずで亡くしている。肉親の死後を生きているということを、折りに触れて意識させられると、自身もすでに自身の、生前をまだ生きているような心地へ惹きこまれる。まして兄の亡くなる半年前には自身、手術の日を待って、命を一日ずつ、先へ送って暮らした時期がある。昨日がもう思い出せぬほどに遠くなり、明日へ繰り越されるだけの今日だった」とある。彼岸と此岸との境は紙一重というようないが綴られている。自分が亡くなった後の視点から、自身の「生前をまだ生きているような心地へ惹きこまれる」のである。ここには死後の視点や意識さえ描き込まれている。それらをまとめるように、この文の直後には「母親はもう三十年も、死んでいる」という独特の表現がある。亡くなったまま、主人公の記憶の中に生きているというのである。雨宿りを共にした老人についても、「あれはまやかしのような夕立だった。雷鳴とともに雨が走り、あの窓の内の女も今では高年に入ったことだろう、まして老人はおそらくとうにこの世にはいない、もう長年、死んでいる、と数え返す間にも雨の音は引いて部屋の内は明るくなり、日が差して来た」（傍点引用者）とある。亡くなったという事実のまま時間だけが空しく経過したということ、作者の実感にも即した表現であろうが、必ずしも効果的

あつたとも言えない。

「雨宿り」のこのような箇所は、作者の年譜とそのまま重なるところがある。昭和二十年の八歳の時に、岐阜県に疎開した^④。疎開や空襲の記憶は、笹山や古井の最深部にある混沌やトラウマにつながるものである。

昭和五十七年の四十五歳の時には、父親の英吉が八十歳で亡くなった^⑤。雨宿りの年から三年前に、父親が脳血栓で亡くなったことも回想として挿入されている。

昭和六十二年の五十歳の時には、姉の愛子が五十六歳で亡くなった^⑥。平成三年の五十四歳の時には長兄が五十八歳で亡くなった。古井自身も、平成三年の五十四歳の時に頸椎の手術で入院した。これらの体験は、「雨宿り」の中にそのまま取り込まれ、リアリティを獲得している。

なお、「雨宿り」の中に用いられている古井のキーワードとしては、「忿怒の相」や「眉をひそめる」や「訝る」や「怯え」など、表情の細やかな描写を挙げることができる。細やかな顔の表情を表しているだけでなく、内面の微妙な心情が、そこには投影されているのである。これらの言葉は、古井の他の作品でも効果的に用いられている。

三

文学作品を読む読者は、意識するにせよしないにせよ、作品のタイトルがその作品全体の内容を統括する記号表現であることを、当然のこととして了解している。

村上春樹に「雨やどり」(『回転木馬のデッド・ヒート』所収、昭60、講談社)という同名の短編小説がある。古井の「雨宿り」と村上の「雨やどり」には、それぞれの作家の個性が集約的に表出されている。この二つの作品を比較することで、現代作家の視点やテーマなどについて考察したい。

村上の「雨やどり」は、主人公の「僕」が雨やどりで入ったレストラン・バーでのが綴られている。店内にはドリス・デイの「イツ・マジック」の音楽が流れ、主人公が読んでるのはソウル・ベロウの新刊であるというように、いかにも村上らしい道具立てである。⁶¹

窓から眺めた外の景色としては、軽トラックの下で大きな白い猫が雨やどりをしていたという詩的な描写もありシャレた光景として描き出されているが、それ以上の効果を上げているとも言えない。また、店に入って来た七人連れのグループについて、「年齢は見たところ二十一から二十九」と思うところでは、「僕」の思い込みの強さも表しているが、少し説得力に欠ける。

元編集者の女性と偶然出会い、そこで打ち明け話を聞かされ

ることになる。会社の同僚と不倫をしていたが、総務課へ配置換えになった。その際にその男の卑屈さも思い知らされた告白する。会社を辞めた後も、五人の男達と関わったことが、あつげらかんと語られることになる。いかにも村上らしい都会の若者の軽い生き方が、世相めいた話として記されている。「二千万万の人間のひしめきあう都会の中で、彼女は自分たまらなく孤独であるように感じた」故に取った行動が、具体的に語られている。

彼女が「一度村上さんをインタビューしたんですよ」と言っているから、一見作者自身の体験を踏まえたような体裁を取っている。だが、これはリアリティを出す為の技法としての要素が強いと見ていい。聞き手である主人公の「僕」は、「要するに彼女にとって僕という人間は記号的な——もう少し好意的に言えば祝祭的・儀礼的な——存在にすぎない」と思う。彼女にとって「僕」は、身の上話を告白する為の記号的で儀式的な存在にすぎないと割り切っている。聞き手がいなければ、いかなる語り／騙りも響かないので、小説の構成として止むを得なかったのかも知れない。それでも、聞き手の「僕」との関わりは希薄なのに、打ち明け話をするという不自然さは残る。小説家の「僕」に創作の素材を提供したいという願望が、彼女にはあつたのではないかと勘繰りたくなる程である。

村上の「雨やどり」では、表題も背景の描写としての要素が

強い。女の話が終ると、主人公の「僕」は何も無かつたかのようになり、雨の上がった店の外に出ることになる。その意味では、この元編集者の女性は雨やどりをしていた「僕」の覚えた幻想という捉え方さえ出来そうである。

これに比べると、古井の「雨宿り」は、諸行無常のこの世の実相を雨宿りに象徴させて、屈折した文体で描き出している。背景が雨であるということは、無常の実相を描き出すことと密接につながっている。

どちらの作品も、雨宿りをすることで主人公の行動が滞っており、そこでの出会いによつて、想定外の出来事に巻き込まれたり想念を引きずったりすることになる。

性的なつながりについても、村上の「雨やどり」では、現世での快楽に着目して金銭が関わる売買としてドライに割り切っている。これに対して古井の「雨宿り」では、娑婆の実相を諸行無常という視点で捉える際に、背後に漂う隠微な気配として描いている。

村上の「雨やどり」では、男と別れた二十八歳の女の身の上話を聞かされることになり、古井の「雨宿り」では、偶然隣合させた老人の呟きを聞かされることになる。雨宿りをした所で、偶然思いがけない人物と出会いストーリーが展開するということでは両者は共通している。

村上の「雨やどり」では、彼女の過剰なまでの饒舌が作品を

支配している。それは主人公「僕」の無聊を紛らすために、彼女が作り上げた架空の「面白い話」だったのでないかという推測さえ生じさせる。主人公の「僕」は彼女のおしゃべりを聞く記号のような存在に後退している。主人公の「僕」は「その昔、セックスが山火事みたいに無料だったころのことを思い出した」とあるが、「僕」自身の具体的な叙述を欠いているので、比喩だけが浮いていて説得力に欠けると言わざるを得ない。

それに対して、古井の「雨宿り」では、無気味なまでの沈黙が作品全体を覆っており、主人公の笹山の内面描写に重点が置かれている。七十歳に近い笹山の怯えや恐れに焦点が当てられている。

村上の「雨やどり」には、世相小説や風俗小説といった要素があることは否定できない。それ以上の深い所まで掘り下げて描かれているわけではない。彼女が「僕」の所持金を言い当てる所も、彼女の他者への観察力や洞察力が優れていることを示している。シャレた技法という程度にすぎない。

なお、この二作と同様に、雨宿りが作品の中で重要な要素となっている作品として、芥川龍之介の『羅生門』や川端康成の『伊豆の踊子』を挙げることができる。

『羅生門』では、「一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」が、二階に上がり、老婆に出会ってしまう。下人に迫り詰められた老婆が、開き直つて悪が蔓延している社会の実相

を語ってしまう。すると下人はひるむどころか、悪人に変身してしまう。しかも、羅生門に泊まることもせず、その日の内に羅生門を立ち去ってしまうのである。「黒洞々たる夜」の闇の中に消えてしまうが、この時に雨は止んでいたのかどうかについては、作品の中に詳しい言及はない。「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くという事が、それだけですでに許すべからざる悪であった」としかないので、雨はそのまま降り続いていたものと思われる。

また『伊豆の踊子』でも、主人公の「私」が雨宿りした峠の茶屋で、旅芸人の一行と接近することになる。「雨宿りの茶屋でびったり落ち合ったものだから、私はどきまぎしてしまっただ」のである。旅芸人の一行が先に出かけた後、茶屋の婆さんから、踊子一行の不幸な境遇を知らされることになる。雨宿りすることで、「私」と踊子の出会いの発端となっており、また踊子の境遇まで情報として知らされることになるのである。

『羅生門』も『伊豆の踊子』も、雨宿りが作品を展開する上で有効に機能している。

四

以上のように、古井の「雨宿り」は、雨宿りという出来事を通して人生の無常迅速を象徴的に描き出している。諸行無常で

あり、混沌としたまま年月は経過して行くということを、主人公笹山の目を通して実感的に描き出している。

古井の「雨宿り」は、一見小説のような体裁を取っていないが、随想的な要素を意識して取り入れることでリアリティを獲得している。物語性を切り詰め、随想的であることで説得力が強められている。

村上の「雨やどり」と比べても、両者の個性や資質の差は歴然としている。あくまで世相の描写にこだわる村上と、無常な人生を実感として描写する古井の違いである。性的なつながりにについても、村上の「雨やどり」では金銭的な駆け引きとして割り切ってしまうが、古井の「雨宿り」では、背後に潜む隠微な気配として描き出している。村上と古井は同時代を生きており、同名の短編小説でありながら、通底する主題やイメージは乏しいと言える。ストーリーテラーの要素が強い村上と、そのような物語性を極力切り詰めようとする古井の違いである。

古井の「雨宿り」では、現実と幻想、現在と過去、生と死、老年と若年、随想と小説といった二項対立するものと両義的な要素を取り入れながら、精妙な文体で形象化している。このように多層的な捉え方をしており、しかもそれらが、混沌としたまま投げ出されている。そのことで、人生の実相を掘り下げ表出しているところに、古井の「雨宿り」の独自性がある。六十九歳の古井が、自身の老境の心理を描くだけでなく、中年

期や少年期の記憶やこだわりまで呼び寄せている。それは脳内の反応を、虚心に写し取ろうとした結果とも言えるだろう。老境に入った古井が、時代としての停滞もにらみ据えながら、人生の実相を兩宿りに象徴させて描いた奥深い作品であると言える。

注

- (1) 天地創造の闇を聖書では黒暗淵やみわたと言うが、それに因んで古井は娑婆の実相を白暗淵しろわたという捉え方をしている。
- (2) 池田雄一「古井由吉『白暗淵』万物の終焉」(『文学界』平20・3)、古谷利裕「踏みとどまる《膝》古井由吉『白暗淵』論」(『群像』平20・5)、阿部公彦「作家の『曲がり目』を読む」(平28、講談社文庫『白暗淵』「解説」)などに言及があるが、いずれも短編集全体についてである。
- (3) 「小説と土地」に「終戦の日の前後二カ月ほど岐阜県の大垣市と美濃市とに縁故疎開した」とある。
- (4) 「値段の風俗史」に「先年夏から入院していた父親の死を報らされた」とある。この父親の死については、「午の日」に詳しく描かれている。
- (5) 「影くらべ」に「夏の末のことだ、姉貴を亡くした。六つ違いの。癌でした」とある。また『仮往生伝試文』でも姉の死について触れている。
- (6) 「蝙蝠ではないけれど」に「四歳年上の長兄が急逝」とある。

(7) 「僕」と彼女が頼んだウイスキーがシーヴァス・リーガルであり、つまりがピスタチオであることも村上らしい道具立てである。